

令和6年度秋田県総合教育会議 議事録（要旨）

1 日時 令和6年12月23日（月） 午後3時15分～午後4時15分

2 場所 議会棟大会議室

3 出席者

秋田県知事		佐竹 敬久
秋田県教育委員会	教育長	安田 浩幸
	委 員	吉村 昌之（教育長職務代理者）
	委 員	奥 真由美
	委 員	松塚 智宏
	委 員	大塚 美穂子
	委 員	高橋 重剛

4 開会

□石井企画振興部次長

ただいまから令和6年度秋田県総合教育会議を開会します。
はじめに、佐竹知事からあいさつを申し上げます。

5 知事あいさつ

□佐竹知事

本日は大変お忙しい中、今年度の総合教育会議に御出席を賜り、ありがとうございます。また、日頃から本県の教育行政に御尽力いただき、感謝申し上げます。

さて、本日のテーマは「読書活動の推進」です。最近では、スマホやタブレットが普及するにつれて、書店がない市町村も増えているほか、海外の論文などでも、活字を読む機会の減少によって様々な弊害が出てきていると指摘されるなど、読書離れが社会的な問題となっております。

そうした中で、本県においては、「読書が好き、どちらかと言えば好き」と読書に対して肯定的な意見を持つ方が60%以上いる一方で、「全く読書をしない」という方も増えています。県の読書条例の理念をいかに普及していくか、小さい頃から活字に触れてもらう習慣をどのように身に付けてもらうかということは教育課題でもあることから、そのような観点からも御意見をいただきたいと思います。本日はよろしくお願いします。

□石井企画振興部次長

続きまして、秋田県教育委員会安田教育長からごあいさつをお願いします。

6 教育長あいさつ

●安田教育長

知事をはじめ、知事部局の皆様には、日頃から本県の教育行政の推進について、御理解、御協力いただき、感謝申し上げます。

本日のテーマの「読書活動の推進」については、知事からもお話があったように、「秋田県民の読書活動の推進に関する条例」の基本理念に則り、県民の読書活動に関する総合的な施策を実施していただいております。

教育委員会としましても、児童生徒の身近な読書のある学校図書館の活性化やおすすめの本を紹介する「ビブリオバトル」の実施などを通じ、読書の楽しさを理解し、自分の心や生活をより豊かにするための取組を行っているところであります。

「若者の読書離れ」が言われて久しい中、近年ではYouTubeなどの動画の視聴により、ますます読書の時間を確保することが難しくなっております。しかし、本と向き合うことでしかできない体験、そこから得られる感動は、子ども達だけでなく、大人にとっても貴重なことだと思います。

本日は、知事と教育委員会委員が話し合いの場を持つことができる非常に貴重な場であることから、忌憚のない意見交換を行い、これをきっかけに様々な取組を一層推進できればと考えております。本日はよろしくお願いします。

7 議事

□石井企画振興部次長

それでは、次第4「議事」に入ります。

運営要綱第3条に基づき、会議の議長は知事になるものとされておりますので、知事に進行をお願いします。

□佐竹知事

それでは次第に従い、進行します。

次第4「議事」「(1) 読書活動の推進について」、観光文化スポーツ部、教育庁からそれぞれ説明をお願いします。

□小原文化振興課長

(資料1に基づき説明)

□古屋生涯学習課長

(資料2に基づき説明)

□佐竹知事

それでは、教育委員の皆様から御意見を伺ってまいります。

◎吉村委員

はじめに、文部科学省では「読書することは、『考える力』『感じる力』『想像する力』『表す力』『国語の知識等』のいずれにもかかわり、これらの力を育てる上で中核となるものである。特に、すべての活動の基盤ともなる「教養・価値観・感性等」を生涯を通じて身に付けていくために極めて重要なものである。」と示しており、私自身も読書によって想像力を身に付けることを期待しています。本を読むことで、自分がその物語の主人公に成り代わり、様々な意見や感性などに触れながら「想像力」を養い、新たなものを作り考える「創造力」を身に付けていくことができるのではないかと考えています。

全国学校図書館協議会が公表している「学校図書館調査」において、1校当たりの図書購入費が、小中高で10年前と比べ、2～8万円下がっているとともに、平均図書購入数も1年間で80冊以上減っているという結果が出ています。また、政府としても、子どもの読書活動を推進していく中で、学校司書の不足が大きな課題として挙げられています。現在の学校司書の約7割が非常勤となっていますが、司書は専門的な職種であることから、専任の司書が学校にいたることが、児童生徒の読書活動の推進にとって重要なことであり、行政として、予算的な配慮も必要だと思います。

先日、経済協力開発機構（OECD）が世界31か国の16～65歳を対象に実施した「国際成人力調査」の結果が公表され、日本は「読解力」「数的思考力」で2位、「問題解決能力」で1位の総合2位となり、1位のフィンランドとの違いは、リスキリングであるとの報道を目にしました。当然、この結果を直接的な読書活動の推進の成果として結び付けることはできませんが、これまでの取組の結果が一因となっていると思っています。

文部科学省においても、公共図書館の運営基準を見直し、学校図書館との連携の強化、地域書店との共存の仕組みづくりなど、文字文化の振興を目指しているほか、知事もおっしゃったように、地域の書店が20年前と比べ半減したとも言われている中で、公共図書館の役割は非常に大きいものであることから、地域の書店との協力体制の構築・共存に向けた取組の必要性はますます高まってくると思います。

これからの秋田を担う子ども達の読書活動の推進と共に、県が定める「生涯

にわたって読書に親しみ、心豊かに」という基本目標の実現に向け、大人の読書活動の推進を改めて図っていくことも一つではないかと思っております。

◎松塚委員

資料 1 に「1 日平均 30 分以上読書をしている県民の割合」が 39.4%と記載されており、私自身も仕事によって読書の機会を確保できずにいたことから、反省しなくてはいけないと感じています。

先ほどの説明にもありましたが、児童生徒を対象とした読書活動の推進に係る取組は充実しており、高校生までの間には、様々なジャンルの本に触れる機会や本を読む機会が多くあると思います。

しかし、社会人になると仕事の忙しさや書店の減少、雪国である本県の環境なども影響し、本に触れ、本を読む機会が減ってしまうことが課題と感じていることから、スマホやタブレットの普及により、利用者が年々増加している電子書籍を図書館でも活用できるようにすることも一つと考えます。導入にかかる予算面やスマホ等を長時間見ることによる健康への影響などの新たな課題もありますが、仕事で多忙な方や高齢者、障害のある方が、図書館の開館時間に関係なく、自宅にしながら本を借りて読むことができる点は、非常にメリットが大きいと思います。

併せて、漫画の活用についてです。昔から「漫画は読書なのか」という議論はありますが、現在、YouTube を始めとした動画の視聴が当たり前となっている若者達に対して、いきなり活字だけの本を読むことを推奨するのは、非常にハードルが高いほか、書店の売り上げが減っている中、漫画の売り上げは増加していることを踏まえ、漫画を本との出会いのきっかけとして活用していくことも一つだと思います。特に、漫画の中でも社会的なテーマを扱っているものもあり、そういった漫画と同じテーマを扱っている活字の本をセットで図書館に並べておくことで、より多くの人々が本を手にするようになるのではないかと思います。

◎奥委員

仕事柄、子ども達と接する機会がある中で、多くの子ども達が在宅中の相当な時間を使って YouTube など動画の視聴をしていることに加え、朝読書や読書感想文、課題図書などにも拒否反応があり、「できれば読みたくない」「読書をやらされている」と感じている子どもが一定数いるなど、「若者の読書離れ」は着実に進んでいると感じていることを踏まえ、次の 2 点について御提案したいと思います。

一つ目は、生涯学習課で実施している「ビブリオバトル」についてです。こ

れまでも、「本の魅力を知ってほしい」「多くの人に読んでもらいたい」という学生達の熱意あるプレゼンを聞くことで、それを聞いた本に関心のなかった子も「面白そう」「読んでみたい」と感じ、読書を始めるというケースがありました。現在の大会は、中学生と高校生を対象に、地区大会・県大会・全国大会という形態で実施していますが、より多くの県民に読書の面白さなどを知ってもらうため、小学生や大人も対象に加えつつ、更に小さい規模の学級や学校単位などでの開催を検討していくことも一つではないかと思います。

二つ目に、同じく生涯学習課で実施している「読み聞かせボランティア養成講座」についてです。現在の講座は、保育士を目指す方などが受講しているとのことでしたが、仕事柄、新米パパなどから読み聞かせについての相談を受ける機会もあることから、参加者それぞれの段階に応じた講座を用意するほか、受講後に資格取得につながるようにするなど、読み聞かせという側面から、県民が読書活動に広く関わられるような仕組みにできないかと考えています。

読書だけを切り離して推進するよりも、読書が人生の一部であるという認識を持ち、各取組を推進していくことで、県民が読書の面白さはもちろん、読書を通じて知ることができる考え方などに触れることができ、結果として、県民のウェルビーイングを高めていくことにもつながると考えています。

◎大塚委員

今の子ども達は、デジタル機器の扱いに慣れており、読書もスマホやタブレットを使うことが多い状況です。しかし、認知能力を研究している大学の先生の講演の中で、スマホなどから発せられるブルーライトが、視力や認知能力に悪影響を及ぼすほか、紙媒体による読書の方が記憶に残り、認知機能が落ちにくいということが証明されているとの話があったことを踏まえると、医学的な見知からも、小・中学生頃までは紙媒体による読書を推進すべきではないかと思っています。

保護者による読み聞かせについては、乳幼児の情緒安定や親との愛着形成を図るためにも非常に効果が高いと言われており、「子どもの言葉の発達が遅い」との相談があった方にも読み聞かせを勧めていますので、より多くのお父さん、お母さんに読み聞かせをしてもらえればと思います。

現在、ディスレクシア（識字障害）の子どもは全体の7%程度いると言われており、学校での読書時間に読みが進まず困っている子ども達も一定数いると考えられます。そのような子達に対して、学校から配付されているタブレットを使い、オーディオブックなどの活用も検討していくことで、より多くの子ども達が読書を好きになってくれるのではないかと思います。

◎高橋委員

我が家の小学生と幼稚園児の子ども達の現状は、寝る前の約10分、本を読み聞かせしている程度であり、ほとんどの時間をYouTubeで動画を見て過ごしています。子ども達の「読書離れ」を実感し、読書をしないことによる弊害を懸念していることから、読書との付き合い方については、家庭だけではなく、県としても取り組むべき時期に来ていると思います。

私自身を振り返ると、子どもが動画を見るきっかけとなったのが、乳幼児期の子どもを泣き止ませるためであり、その時点で読み聞かせの重要性やスマホ等が与える影響などを知っていれば、動画を見せることに頼らない子育てを実践することができたのではないかと考えたことがあります。その経験を踏まえ、育児教室などの際に、それらの内容を組み込んだリーフレットなどを配付し、啓発することで、今までの取組を更に深化させることができるのではないかと思います。

また、子どもが通う小学校では、朝読書のほか、おすすめの本について、1～2行程度の文書で紹介するカードを作成し、友人間で交換する取組をしているようです。詳細は不明な部分もありますが、このカードに書かれた文章だけでは、その本に対する熱意などが伝わらないこともあるため、更に一步踏み込み、その本について、友達とコミュニケーションを図る場面があれば、自分の考えを伝える機会ができるほか、それを相手に聞いてもらえるという自己肯定感の向上にもつながると思います。スマホ等による動画視聴の依存度は、年齢を重ねるごとに高くなると感じていることから、県として、読書に対する思いがまだ芽生えていない子が多い小学校低学年へアプローチし、読書の習慣化を図る取組が必要だと思っています。

□佐竹知事

昔と比較し、現在の書店では、雑誌や小説など多くの種類の本を扱っているほか、電子書籍の普及などにより、活字を見る機会自体は増えている印象があります。また、私が若い頃の読書と言えば、名作と呼ばれている作品や古典などを読むことであるという考え方が主流でしたが、現在の読書形態の多様化などを踏まえ、何をもって読書とするのかを改めて考えていく必要があると思います。

また、現在、スマホやタブレットの普及など、子育てにおける便利なツールが増えていますが、それらを与えることが当たり前となってしまうと、子どもの思考力の育成などに影響が出てしまうことが危惧されています。

そのため、様々なものの普及で生活が大きく変化する中、読書に対する価値観を改めて考えてみる必要があるとともに、子どもが興味を持ちやすい漫画な

どを入り口にしながら、字数が多い漫画などを親が選択して与えるなど、子どもの読書の習慣化を図っていくことも必要ではないかと思います。

●安田教育長

今の時代を急に変えることは難しいほか、本を読まない人に読書を勧めても急には変わらないことが多いため、幼少期から小学校までの間に読書を習慣化していくことが重要であり、可能であれば、その期間に名作と言われる作品を読み、感動するという体験をしてもらいたいと考えています。

そのためには、先ほどから話題になっているように、学校はもちろん家庭の役割が大きく、家庭の中で、スマホと同じように本を身近なものとして感じてもらえるよう、子どもへの読み聞かせや親が本を読んでいる姿を見せること、機会がある度に書店に寄って本と触れる機会を増やすことなどが重要だと感じています。

教育委員会としても、PTAなどを通じて大人達に読書の素晴らしさなどを啓発していくほか、子ども達が動画を見ることを逆手にとって YouTuber から読書の良さについて発信してもらうこと、関心のない子どもにも「ビブリオバトル」の様子を知ってもらうため、SNSも有効活用していくことなど、いろいろと工夫できる余地があるのではないかと思います。話を伺っていたところでした。

そのほか、学校での朝読書などの読書活動の推進のほか、学校図書館の利用を促す取組を進めていくことも大切になると考えており、家庭や学校での読書活動の活性化に向け、それぞれでアイディアを出しながら、取組を推進できればと考えております。

□佐竹知事

続きまして、「(2) その他」として、「日本語教育環境の整備について」、企画振興部から説明をお願いします。

□荻原国際課長

(資料3に基づき説明)

□佐竹知事

それでは、教育委員の皆様の御意見を伺いたいと思います。御意見のある方は挙手をお願いします。

◎大塚委員

能代山本地域では、「のしろ日本語学習会」というボランティア団体が、外国の方の病院受診の付き添いを始め、日常生活における様々なサポートを精力的に行ってくださっています。

日本で育った外国出身の子ども達は、小学校などでの学習により日本語を習得し、日常生活を支障なく過ごしている一方で、親が全く日本語を分からず、日常生活でのサポートが必要になるケースもあり、継続的な支援が必要となっています。

県内の他の団体と同じよう、同団体も高齢化による後継者不足が課題となっていることから、外国の方へのサポート体制を絶やさないように、行政としても何らかの支援をしていただければと思います。

□佐竹知事

全県的に様々な国の方々が住むようになり、それに伴って使用する言語数も増えている状況であることから、県国際交流協会では、全県におけるボランティアの募集や総合的な研修会の実施などを支援しています。

また、子どもの読者活動の推進については、活字を順序立てて読み、自分の頭で考えるという力を育成する上でも重要であります。動画の視聴やAIの普及などによって、その力を育てられない又は退化させてしまうことが世界中で危惧されています。

そのため、本日の議論の中でも出てきた「読書離れ」は、単に読書だけの問題ではなく、より根本的な問題であるとの意識をもち、引き続き、教育委員会と連携しながら対応していくことが必要と考えております。

本日は、ありがとうございました。

8 閉会

□石井企画振興部次長

これをもちまして、令和6年度秋田県総合教育会議を閉会します。